

# DEATH NOTE(デスノート) the Last name

2006(平成18)年11月3日鑑賞(梅田ピカデリー)

★★★★



監督=金子修介/出演=藤原竜也/松山ケンイチ/戸田恵梨香/片瀬那奈/上原さくら/マギー/中村獅童(特別出演)/池畑慎之介/藤村俊二/鹿賀丈史(ワーナー・ブラザーズ映画配給/2006年日本映画/140分)

……前編の大ヒットに続いて後編も初日から「デスノート現象」が……。観客席を埋めつくした若者達が、ゲーム感覚でライトとLとの頭脳戦に一喜一憂するのも悪くはないが、硫黄島2部作の『父親たちの星条旗』がガラガラだったことと対比すると複雑な思いが……。後編のポイントは、第2のデスノートと第2、第3の死神の登場。それによって物語はより複雑性を増すため、手の幅が広がると共に、天才達の活躍の場も広がることに……。予告編ではライトが「勝った！」と心の中で呟いていたが、さてホントの結末は……？ 大人達も劇場に足を運び、是非キラの賛否についての議論に参加したいものだが……。

## 劇場内は100%満席！ これぞ「デスノート現象」！

『DEATH NOTE the Last name』の公開は11月3日(金)の祝日から。私はこの日3時55分から道頓堀の角座で『手紙』を観たから、同じ角座で『デスノート後編』を観るのが1番便利だったのだが、角座は座席指定ではない劇場。したがって、満席になれば立ち見になる危険性も……。そう考えた私は、わざわざ当日の午前中、妻に全席座席指定の梅田ピカデリーで指定席をとらせ、夜7時からの上映に行くことにしていた。

10分前に劇場の前に着くと、予想どおり観客はエレベーターに乗るのに並んでいる状態。イラチの私はそこに並ぶのは面倒とばかり、階段で10階まで駆け上って妻と合流し席に着いたが、劇場内は『前編』の時と同じで最前列まで空席は1

つもなく100%満席！ もちろん、客の95%が若者たちで、アベックが目立っていた。まさに熱狂は加速し、日本全国「デスノート現象」が起こっていることを実感……。これを見れば、チラシに①『ダ・ヴィンチ・コード』を抜いて初登場堂々の第1位！ ②原作コミックス、200万部の重版決定！ 累計1900万部突破！ ③海外公開決定！ 世界各国50社以上からオファーが殺到！ と自信満々に書かれているのもなるほどと納得……。

## ■ 続編の目玉は第2のデスノートの出現と第2、第3の死神の登場

私は原作は全然知らないが、映画後編の目玉は第2のデスノートの出現と第2、第3の死神の登場。そして、前編と後編のつなぎ役となるのが<sup>あまね ミサ</sup>弥海砂（戸田恵梨香）。

死神リューク（中村獅童）が落とした1冊目のデスノートを拾ったのが天才的な頭脳を持った大学生ライト（藤原竜也）だったことがこの物語の出発点だが、2冊目のデスノートは、リュークとは全く別の意思を持つ死神レム（池畑慎之介）がミサの前に落としたもの。なぜそうなったのか？ それは死神ジュラスが不幸な生い立ちのミサに同情すると共にミサを愛してしまったため……。前編のラストで、いよいよダメかというところまで追い詰められていたミサを救ったのが、第2の死神ジュラス。そしてミサの手元には、第3の死神レムによって第2のデスノートが……。しかし、人間を愛する死神などというのは根本的な自己矛盾。したがってジュラスは、己の破壊という大きな代償を払うことに……。

それはともかく、ジュラスによって助けられたミサは、レムから第2のデスノートを手に入れると共に、ライトさえ手にしなかった最強の武器「死神の目」を自分の寿命の半分を放棄することの見返りとして手に入れることに……。強烈なキラ崇拝者だったミサは、さてここから第2のキラとしてどんな行動を……？

## ■ ミサの生い立ちにカギが……？

死神の目をもらったキラ崇拝者のミサが第2のキラとしてとった行動は、かなり過激なもの。すなわち、ミサはビデオテープをさくらテレビに送りつけ、国民がテレビにくぎづけになっている前で次々とキラに反対する人たちを殺していっ

たのだが、それはこうすればきっとホンモノのキラが現れてくるはずという計算にもとづくもの……。

そしてその思惑どおり、ミサはライトが真のキラであることを遂に発見。天才肌のライトだからこそ複雑なデスノートを理想どおりに使いこなし、同じ天才肌のL（松山ケンイチ）の追及を免れているもの。したがってミサのようなバカな小娘にキラが自分であると知られたらヤバイ。そう考えるのが普通だが、ライトは以降ミサと共同戦線をとる道を選択した。それはある意味やむをえない選択だったが、同時にそう選択するについては、死神ジュラスさえ同情したミサのある不幸な生い立ちが大きなポイントに……。

### 「視聴率」も一種の死神……？

キラ騒動にマスコミがどういう視点で向き合うかは、決してコミック上だけの面白おかしい話ではなく、わが国の本質的な問題だが、そこでいつも問題になるのが視聴率。番組やプロデューサーの評価が視聴率のみを基準になされているのが現在のマスコミ最大の問題点だが、現場の人間としてはいくらキレイ事を言っても視聴率に踊らされるのは当然……。

さくらテレビのプロデューサー出目川（マギー）は、まさにそんな現代のマスコミ問題にみる1つの典型的な男。そんなプロデューサーのところに、第2のキラからビデオテープが送りつけられ、それを放送しなければさくらテレビの上層部に犠牲者が出ると脅迫されたが、「そこでオレの出番！」と逆に喜んだのが出目川。さて出目川はどんな企画を……。

### 『後編』の新顔は2人の美人キャスター

出目川が今最も信頼している美人キャスターは西山冴子（上原さくら）。従前さくらテレビはどちらかというキラ反対論が強く、その世論形成をリードしていたのが、同じく美人キャスターの高田清美（片瀬那奈）だったが、この清美は冴子の後輩。後輩のそんな活躍に歯ざしりしていた冴子は、なぜか今は出目川とベタリ。そして出目川は清美に対して、「お前は華がないんだよ！」と言い放って番組から降ろしてしまい、今やさくらテレビの花形キャスターは冴子一本に。

冴子は今、出目川がこれからやろうとしている第2のキラからのビデオテープを流す放送直前の緊張状態……。出目川は、警察から番組の中止命令が出されたとしても、何が何でも放送を強行して視聴率50%をとる覚悟。したがって冴子も今日はキャスターとしての命をかけた大勝負。さて、その反響は……？

## ライトとLの駆け引きの妙はさらに快調……

『デスノート』が若者たちの圧倒的人気を集めたのは、天才ライトと天才Lのキャラの面白さと2人の間の駆け引きの面白さにある。全く顔を合わせないままでの2人の駆け引きの妙は前編でも冴えをみせ、最後にやっとライトとLが顔を合わせることに。そしてそこでは、何とライトの恋人の秋野詩織（香椎由宇）が死亡するという悲しい結果に……。そしてこれを契機として、ライトはキラ逮捕のため父、夜神総一郎（鹿賀丈史）が指揮する捜査陣に加わるようになったわけだ。したがって今ライトはLが立てる作戦の下に協力してキラ逮捕の努力を続けているが、そんな2人の駆け引きは後編に入ってもますます快調。チェスの勝負では「チェックメイト！」と簡単にライトが勝ち、Lは「お見事です」と降参したが、さて、本業の方は……？ もちろんそれは、映画を観てのお楽しみとし、ここでは触れないでおこう……。

## 立派な対策室だが、ここが主戦場……

後編の舞台の多くは、Lが所有する秘密基地の地下に設けられた立派な「キラ対策室」。ここは外部と完全に遮断された状態で、夜神総一郎直属の部下たち少数の関係者しか出入りできない場所で、その作戦の指令はすべてLが発している。そんな立派な対策室だが、そこで展開されるLとライトとの頭脳戦を見ていると、ここはれっきとした主戦場……？

さらに、この対策室の中には監禁部屋があり、第2のキラとしてすぐに足がついたミサは逮捕され、今は鉄や鎖の拘束具で拘束され、監禁状態に……。 「ライトがキラだということは絶対にしゃべらない」というミサの約束が意外に固くホンモノだったことが、この監禁状態が長引くにつれて次第に明らかに……。しかし、何でもゲーム感覚の今ドキの若者の中には、こんな映画を観て、女の子を監

禁するのも面白いナなどと考えるヤツがいるのでは……？ そう考えると、この映画が大ヒットしているだけに少し恐い気がするが……。

## ライトの監禁志願の狙いは……？

長期にわたる監禁にもかかわらず、ミサは決してキラとの関係を自白しなかった。しかし、ある日、ある事情でミサのキラに関する記憶が完全に消された後は、昔のあっけらかんとしたミサに逆戻り……。これにはLをはじめとする捜査陣はただ振り回されるだけ……。そんな中、まだ自分がキラではないかと疑われていると十分自覚しているライトは、自らを監禁してくれるよう志願した。その狙いは、自分はキラではないと確信しているが、自覚しない行動をとっているかもしれないことを前提として、自分が監禁状態にある中、キラによる殺人事件が起きれば、自分がキラではないことが立証できるはずだということ。ライトからそう言われれば、Lとしてもそれを受け入れないわけにはいかないのは当然。後編の見せ場の1つが、ミサの監禁とライトの監禁風景（？）、そしてその陰で火花を散らすライトとLとの頭脳戦！ 果たして、ライトの監禁中、キラによる凶悪犯の殺人は実行されるのだろうか……？

## 夜神総一郎の存在感はさすが……

キラ事件の捜査本部長は鹿賀丈史演ずる夜神総一郎だが、その作戦はすべてLに任せ、Lの指示どおりに動くことと約束したのが総一郎の偉いところ。前編では信頼しているライトがLからキラではないかと指摘され、わが家に監視カメラをセットするという作戦まで甘んじて受けた総一郎だが、後編ではさらに、ライト自身の提案によるものとしても、ライトの監禁までオーケーに……。他方、冷静沈着な捜査本部長とばかり思っていると、さくらテレビのあまりにも傍若無人な放送を中止させるべく、1人トラックで現場へ乗りこみ、拳銃を乱射したり、プロデューサーの出目川を脅してまで放送を中止させるという勇氣ある行動を……。

そんな本部長は、最後のクライマックスではLからある任務を受けて第2のデスノートを入れた小型トランクを手錠で自らの手首に結びつけたスタイルでアメリカへ……。しかしその本部長の留守の間に対策室では一体何が……？ そして、

見事ライトはLとの頭脳戦に勝利し、その理想が実現することができるのだろうか……？ もしそうだと、総一郎は本部長としてキラ逮捕の任務を全うすることができないことになるが、さて……？

## 大人たちも是非劇場に……

私は若者たちが『デスノート』ばかりに注目して、同時期に上映されているクリント・イストウッド監督の『父親たちの星条旗』（06年）に見向きもしないことに苛立ちを覚えているが、この映画の出来自体は相当なもの。原作コミックの中にある死神が、スクリーン上にこの映画のような形で登場すると、私はそれだけで違和感を覚えてしまうが、まあそれはストーリー構成上やむをえないものとして納得しよう。そうすれば、「デスノート」をめぐる人間論、哲学論、犯罪論は相当興味深いものがあり、若者たちがこれをネタにいろいろと議論を盛り上げることができれば十分価値があるもの。

単純なゲームより複雑なゲームの方が面白いのは、丁半バクチやポーカーよりもマージャンの方が面白いのと同じで、それは当たり前。その意味では、死神がもたらしたデスノートに関して存在するたくさんのルールを前提として、天才ライトがそれを理想的な社会を築くために知恵を絞って駆使するという構想がまず立派。また、その対抗馬として同じ天才ながらアウトロー的なキャラのLを設定したのが、『デスノート』が若者の支持を受けた所以。この映画は決して若者だけのものではなく、大人も十分楽しめる出来になっているから、是非大人たちも劇場に足を運び、その頭脳戦を楽しんでもらいたいものだが……。

2006（平成18）年11月7日記